

新年おめでとうございます。本年も放送番組センターへのご支援とご協力を宜しくお願い申し上げます。2012年1月

## TOPICS 今号のトピックス

- 番組上映会&公開セミナー『東日本大震災・報道記者は何を伝えたか』
- 11月、放送番組を大学教育に活用するモデル授業を集中講義で実施

### ■番組上映会&公開セミナー『東日本大震災・報道記者は何を伝えたか』

#### ■9、10月に『3.11大震災 記者たちの眼差し』 パートI・IIの番組上映会を開催

『3.11大震災 記者たちの眼差し』は、東日本大震災取材した全国のJNN系列27名の記者が参加し、「個人の目線」から被災地取材を振り返った、各8分のオムニバス・ドキュメンタリー。震災から3ヶ月後の6月5日にTBSテレビ『報道の魂』の枠で放送された。放送ライブラリーでは、JNNの協力を得て9月9日から25日に番組上映会を開催した。15日間で364人が訪れ、3時間を超える番組にも関わらず真剣に画面に見入る姿が見られ、震災報道への関心の高さが伺われた。「記者の思いを熱く感じる事ができた」「テレビや新聞では伝わらない記者の生の声が聞けた」など多くの感想が寄せられた。10月14日から30日には、同番組のパートII(9月10日放送)の上映会も開催した。なお、同番組のパートIは「アジア・テレビジョン賞」のシリーズ・ドキュメンタリー部門でグランプリを受賞した。

#### ■関連企画として『公開セミナー 制作者に聞く！ ～番組制作の現場から～』を開催

10月22日、番組制作スタッフから番組誕生のいきさつ、番組にかけた思いなどを聞く公開セミナー「制作者に聞く！」を開催した。JNN系列の記者たちによる『3.11大震災 記者たちの眼差し』の番組上映と、番組制作に携わった記者やプロデューサーが震災報道に対する思いを語った。164人の参加者があり、活発な意見や質問が飛び交う熱心なセミナーが展開された。

[登壇者]秋山浩之(TBSテレビ)・武田弘克(東北放送)  
鹿野真源(IBC岩手放送)・岸本達也(静岡放送)  
[司会]石井 彰(放送作家)

#### 被災地でのそれぞれの思い

**石井** この『記者たちの眼差し』は、震災報道に携わったJNN各局・合計41名の記者が、被災地で感じたことをそれぞれ8分ずつリポートしたのですが、まずこういう番組をやろうとしたきっかけをお話いただけますか。

**秋山** 東日本大震災は放送局が直面した最大の災害で、取材もJNN全局の記者を被災地に投入するという空前の



スケールで展開しました。2ヶ月くらい経って、色々な記者が光るような切り口の取材をしているけれど、それを集め直して記念碑的な番組が作れないかというアイデアがJNNの報道幹部会議で出て、深夜番組のプロデューサーをやっていた私に話が来たのです。同時多発的にもすごい数の悲劇が起きたこの大震災は、一つ二つの視点からでは絶対に描ききれない。なるべく多くの記者に多面的な視点から震災の様子を描いてもらおうという企画書を作りました。ですから「一人称」ということには非常にこだわりました。これだけの震災ですから、その場に立った記者たちは無感覚では到底いられないわけです。現場に入った多くの記者が涙を流しながら取材をしていたということは私も聞いていましたし、その思いも含めて描こうと、そのほうがレポートとしても自然で誠実だし、きっと視聴者に伝わると確信して、この番組を作りました。

【武田記者リポート上映・『記者たちの眼差し』エピソード1】  
津波に遭遇した記者が、逃げねばという思いと必死に戦い、カメラを回し続けた緊迫感に満ちた記録。

**武田** 僕の中では、この「一人称」というのに非常に抵抗がありました。あの映像を撮ったのは、避難の途中で渋滞が発生したからです。「地震後は車で逃げてはいけない」と言われていますが、車の方が速いという心理からやっぱり車を使っちゃうんですね。だけど、海岸沿いは津波がきたら本当に危険な



ということを誰かが撮っておかなければと思ったのがきっかけです。そういう意味で、映像が全てであり、自分の気持ちを別の形でアウトプットするには抵抗がありました。  
**石井** 救助活動をすべきなのか、それともカメラを回すべきなのか、いろんな思いがこの画面の中にも映り込んでいます。

**武田** 宮城に住んでいると、津波の話というのは日常的で、よく住民から聞く話です。その中に「津波の後に必ず引き潮があるから気をつけろ」という話があって、今、完全に水が満ちていても次の瞬間に引いてしまうと予測していました。暗闇の中に「誰かいますか」と呼びかけると、四方八方から「助けてくれ!」という叫び声が聞こえてくる。カメラを回していても、この波が引いたらこの人たちは波に持っていかれてしまう可能性がある、死んでしまうかもしれない人を撮っている、という罪悪感はずっとありました。

**秋山** 見ている人も津波に遭った追体験をしてしまうくらい迫力がある。また津波の恐ろしさだけでなく、もし自分がある場にいたらどうしただろうと考えさせられてしまう映像です。この『記者たちの眼差し』を作ろうと考えた時に、エピソード1は、この作品だと密かに決めていたんです。

**【鹿野記者レポート上映・『記者たちの眼差し』エピソード3】**  
震災直後被災地に入った地元記者の記録。ほどなくしてメディアで使われだした「復旧・復興」の言葉に違和感を覚え始める。

**石井** 鹿野さんは、取材される中で、外からの「がんばろう」という合唱への違和感を感じていったという。その中で、何を優先して伝えていこうとお考えになったんでしょうか。



**鹿野** 今放送している映像は、被災者の方は停電で見られないんだと気付いたのです。うちの会社はラジオも放送していますが、取材の先々で会社の腕章を見た方が、名前と所在地と誰に伝えたいかということメモにして渡してくるんです。被災地ではラジオしか情報を得る方法がないので、生き別れになった家族に自分は今どこにいると伝えてほしいと。それを一番大事にしました。自分は釜石で2年間生活をしていて、沿岸担当の記者は津波の防人としての役目がとても大きいので、節目の時期には、経験者の声を伝えるなど津波防災について継続的に伝え続けていたのですが、自分は地震の瞬間は盛岡にいて、そういう意味では町にいなかったことに対する負い目を感じています。

**秋山** 鹿野記者のレポートは、そこで生活していた人の目線が非常に良く出ています。東京発のニュースは、被災地は復興も何もしていないのに、あたかもそうしているかのような言葉を使っているというのは、彼のレポートを見て改めて気付かされましたね。

**【岸本記者レポート上映・『記者たちの眼差しII』エピソード17】**  
記者は被災地の現状とテレビの映像がかけ離れていることにショックを受ける。それでも被災者は「テレビが楽しみ」と言ってくれた。

**石井** 岸本さんのレポートは、「テレビは現実を映していない」ということが一番の核心にあると思うのですが。

**岸本** 被災地の様子を静岡で3月11日以降ずっと見ていて、2週間後に応援に入った時、それまでテレビで見ていた映像と全く違うことが分かった。一番のショックは、さっきまでそこにあった生活用品が土砂にまみれて埋まっていたことで、足元から伝わる感覚はとても嫌なものでした。それまで静岡で見ていた映像は、漁船が町の中を転がっているような世界で、それはそれで被害の大きさを物語っているわけですが、普通の家庭が破壊されていたということに何より衝撃を受けました。テレビは派手な映像を撮りたがって足元に目を向けないところがありますが、そういう感触とかは画面では分からない。“訴求力の優先順位”を指標に考えれば、仕方がないことかも知れませんが、とにかく静岡で見ていた映像は何だったんだろうと強く感じました。



**秋山** このレポートはテレビ論になっていますね。この番組の一つの柱というか、我々は何ができていないのか、何が描けていないのか、というところをきちっと岸本さんが描いてくれている。これを見てしまうと、もう後にレポートが続かないなどと思った。『眼差しII』の最後を締めるのに相応しいと思います。

## 震災報道の壁と記者たちの苦悩

**【遠藤善哉記者（テレビユー福島）レポート上映・『記者たちの眼差しII』エピソード4】** 原発事故の影響で閉鎖せざるをえなくなった、80年の歴史を持つサラブレッド牧場の取材記録。

**【萩原崇志記者（南日本放送）レポート上映・『記者たちの眼差し』エピソード6】** 万里の長城のような防潮堤も破壊された岩手県宮古市田老地区の取材。毛布でくるまれ運ばれていく遺体、雪降中の遺体安置所の映像も記録した。

**秋山** 原発報道に関しては、我々メディアは“大本営発表”という形でかなり批判されている。それに対しては忸怩たる思いがありますが、この遠藤記者は会社のルールと闘いながらこの映像を撮っていたんです。我々記者には、原発エリア内何十キロ内は立ち入ってはいけないというルールがあります。かといって、そのルールに現場が単に従っていたかというとなんかそんなことはなくて、この記者は、知り合いのサラブレッド牧場がいよいよ馬を手放すと声をかけられた時に思わず行ってしまうわけです。「会社のルールで行かれません」とは記者だったら言えない。上司とうまくいかなかったかもしれないし、映像は放送できないかもしれないけれど、それでも行くのが記者の魂というか良心だと思うのです。

大本営発表と言われている一方、現場では社内のルールと闘いながら、原発の近辺で何が展開しているかに向かっている記者がいる。一人一人の記者は、それぞれが突破すべきものと闘って取材を続けている一つの見本だと思いました。

**石井** 先ほど、萩原記者のレポートを見て頂いた理由は、ああいふ形で遺体が映るレポートはほとんどないからです。



岸本さんの「テレビは現実を映していない」ということを、僕が被災地で一番感じたのは、「2万人近い人が亡くなっているということがテレビから伝わってこない」ということです。テレビ映像の瓦礫の下に遺体が埋まっているとは想像しづらいと言ったらいいでしょうか。

**鹿野** 見せられるものと見せられないものの不文律を、取材していて感じます。映像の中に遺体が映っていても当然テレビでは流れない。あとご覧になった方たちの想像に頼っているのかなという感じはしますね。

**武田** 歴史的な映像、例えば戦争の記録映像には死体が必ず映っているのに、今回はもしかしたらそういう記録としても死体を撮ってない可能性がある。亡くなった人の尊厳もありますし、もちろんニュースでやれとは言いませんが、津波でいかに多くの人が犠牲になったかという悲惨さを伝えるためにも記録として撮っておくべきだと思います。

**秋山** テレビというものは、不特定多数の人に見てもらう関係上、もし見せるなら「これから遺体の映像が流れます」というようなただし書きが必要かなと思います。それと、遺体の主には必ず家族がいてそれを見る可能性があるわけです。自分の家族の遺体をテレビで見るとということには配慮が必要ではないかと思います。

**岸本** 今年8月に静岡県で総合防災訓練がありました。しかし、あれだけの大災害があって、しかも東海地震が懸念されている地域に住んでいながら、その半年後には住民はもう大地震のことを忘れてしまっていることに愕然としました。その時感じたのは、地震や津波がどれだけ恐ろしいかを僕らは伝えられてないんじゃないかということ。それを伝える一つの手段として、人の気持ちに最も深く惨禍を刻み付けるという意味で、遺体の映像を流すこともありなのかなと。放送は震災の事実、そしてその教訓を伝える役割があります。発災直後から津波の映像があれだけ流れているにも関わらず、たった半年で静岡の人が忘れてしまうのであれば、遺体の映像の可否について考えようと思わない僕ら報道機関にも問題があるのではないかと思います。

**鹿野** 震災直後の現場を取材していて、報道の倫理観とカールを抜きに0から考えてみた時、私は見せる必要もあるのではとも思いました。そうしなければ、その場所で津波によって確かに人が死んでいるんだということがリアルにイメージできないだろうと思ったんです。“見せ方の工夫”をすることはできるけれども、まったく見せないとなると想像力の限界があると思いました。震災の最大の被害は当然人的被害であるにもかかわらず、そこに対しては伝えることについて、すごくハードルが高いということ、実際に映像を使う時に感じますね。

**武田** 遺体と直面した時に何も考えなかったという反省があります。僕は「遺体＝撮るべきではない」と、今までそう教えられてきたというだけで判断してしまっただけ。使う使わないはまた別の次元ですが、撮るか否かという逡巡すら無かったのは非常にまずいと思っています。

**秋山** 記録と放送に差があるという武田さんの意見は本当にそのとおりだと思う。何十年経った時に、この地震に関して死体の映像が全く無いというのは、もしかすると我々は決定的な過ちを起こしてしまったのかもしれない。つまり、この震災の真実を記録するという意味において、「どうせ使えないから」とオートマチックにカメラを置いてしまうことが現場で起きていたとすると大きな間違いでしょうね。撮影はするけれど、慎重に検討を加えたうえで放送するかしないかを決めるということを確認しあう必要があると思います。

**石井** 僕は露悪的に死体を映すべきだと言っているのではありません。毛布に包まれて運ばれていく遺体を多くの記者が見ていた。でも、残念ながらその記録は現時点では残っていない、そこからリアリティが一つ失われたかもしれないという気がしているんです。

## 「一人称」の可能性

**岸本** 番組で「映像は無力で言葉は貧しく」と表現しましたが、僕たち取材者も初めての経験なので、一人一人が歩いて、震災後の風景を見つめて、感じ



た言葉を積み重ねるしかないのかなと。そういう意味で今回の『記者たちの眼差し』は統一感がなくてもいいと思っています。それぞれの積み重ねで、視聴者に届く言葉が生み出されていくのではないかなと思います。

**武田** 被災地に行くとき煙たがられて「マスコミ？何しに来たんだ」という感じがあるし、僕らがどういう気持ちでカメラを回しているのか分かってもらえなかった方もいたと思います。この番組がきっかけで「あの時マスコミはそういう気持ちで臨んでいたのか」と感じて頂けたらと思います。

**秋山** 僕は記者という仕事が大好きで、とても人間的な仕事だと思っています。でも世間からは、記者はプライバシーに平気で踏み込んでいく、無神経にカメラを向けるというイメージを持たれているのが残念だと日々思っています。本当はそうじゃない、我々も悩みながら取材をしているし、生身の人間として傷付きながら仕事をしているということをどこかでPRしなければ、記者のイメージはどんどん悪くなって、興味本位だとか視聴率主義だとか言われて蔑まれていく。そうなる若くは人もテレビの世界に入ってこなくなる。その危機的な思いが一つにありました。

もう一つは、テレビにおいて「私」を表現する場をどこかに残しておくべきだと思っています。今のニュースで、一人の記者が1から10まで全部やるというケースは東京ではほとんどないんです。取材する記者と原稿を書く記者とVTRを編集する記者が違うという、ある種の分業制になってしまっただけで、「我々TBSは」というあいまいな主語で情報が伝えられている。そうではなく、どの記者がどんな思いで現場に行き、最後まで責任を持って視聴者に届けるのかという、個人の責任をはっきりさせるという形でこの番組は成り立っています。

今、自己表現の欲求がある若い人たちはネットに流れている。テレビは不自由で、がんじがらめで私性も表現できない退屈なものだと若い人は思っている。それではいけない、たまにはこういう番組も作ってテレビでも「私」が表現できるということをもPRしていく。そういう狙いも僕の中にはあったんです。

### これからの震災報道への取り組み

**岸本** 緊急地震速報なり大津波警報なりを、伝える伝えないうで地域の人々の生命を大きく左右するというを、この仕事をやっていて初めて感じました。それまでは視聴者の命までは考えなかったわけですが、情報を伝えることで一人でも多くの命を救わなければいけない。まずは初動をきっちり報道するという、そして、被災地の現状や教訓を取材し伝えることで、決して他人事ではない〈次の災害〉への備えを視聴者に訴えていきたいと思っています。

**鹿野** 私たちはローカル局なので、大風呂敷を広げる必要もなく、そこに住んでこれからもそこで会社が存在していくであろうエリアで、頑張っている人や悩んでいる人と時間をかけて関係を作りながら、一人一人の気持ちを丁寧に取材していくことしかできないと思います。もう一つは、震災報道を特別にしない、これからは日常の一部にとらえていかなければと思います。被災者の方も仮設住宅に入って、不本意ではあるにせよ、そこで日常生活を送り始めているので、ニュースも、“震災関連だから特別”ではなく、被災者の方の生活の一部になればいいと思っています。

**武田** 宮城県では死者が9,500人ほどいますが、なぜそんなに多くの方が亡くなったのかという“死”に拘りたいと思っています。70人の児童が亡くなった大川小学校も、その時何が起きてどういう行動をとったのかがまだはっきりしない。今後、どのような危機意識を持ってマニュアルを整備するかが必要になってくるので、あの時の避難行動はどうだったのか、何で集中的に人が死んでしまったのかということ、取材を続けながら、それを参考にマニュアル整備ができればと思っています。

**秋山** 『記者たちの眼差し』で一人一人の記者が作ってくれたVTRは、この先3年後、5年後にまた新しい作品に成長していくと思っています。私はそれをぜひバックアップしていきたいと思っています。

**石井** 今回は、「何人が死んだ」「どこで誰がどうした」という三人称の報道だけではなく、一人称の「私」がこう感じたという表現を意図することでこの番組が生まれた。私たちが目指すべきものは、誰かに伝える「私」の語りなんじゃないのか。この人にこういうことを伝えたいという気持ちが、「私」をして語らせるといったらいいのでしょうか。今回の番組は、そういう記者たちの新しい表現のきっかけになったと思う。僕は一人称という方法論には大きな可能性があるかと期待を持っていますし、皆さんこれからも大変でしょうが、ぜひ撮り続けていただきたいと思っています。

## 11月、放送番組を大学教育に活用するモデル授業を集中講義で実施



当センターは、早稲田大学ジャーナリズム教育研究所と放送ライブラリーの保存番組を大学のジャーナリズム教育のために、どのように活用することができるのかをテーマに共同研究を進めており、本年3月に研究成果を大学関係者や放送局員などを対象に中間発表会を行った。今回は11月18、19、20日の3日間連続で、大学生を対象に公開授業を実施し、講師は共同研究を推進する「放送番組の森研究会」の10人のメンバーが“テーマの樹”を掲げ、ドキュメンタリーやドラマを盛り込んだ1コマ90分の授業を担当した。毎回の授業には、首都圏を中心に7～8大学の学生40～50人が聴講し、講義の後半には活発な質疑応答があり、時間を超過する授業もみられた。(写真は花田教授の授業風景)

第1日目の開講挨拶で、研究会座長の花田教授は、「それぞれのテーマが放送番組でどう表現されてきたかを検証したい。大学の授業における番組使用のモデルが増えていくことを期待する」と抱負を述べ、モデル授業がスタートした。講師とテーマは、18日の第1講は、青山学院大学法学部・大石泰彦教授の「犯罪の樹」、第2講は早稲田大学教育・総合科学学術院・伊藤守教授の「失業の樹」、第3講はアジアプレス代表・立教大学大学院・野中章弘特任教授の「アフガン・イラク戦争の樹」、19日の第4講は早稲田大学・安藤裕子非常勤講師の「ヒロシマ・ナガサキの樹」、第5講は武蔵野大学政治経済学部・鳥谷昌幸専任講師の「原子力の樹」、第6講は仙台大学スポーツ情報メディア学科・林怡夔准教授の「華僑の樹」、第7講は早稲田大学教育・総合科学学術院・花田達朗教授の「沖縄返還密約の樹」、20日の第8講は日本大学法学部・別府三奈子准教授の「ベトナム戦争の樹」、第9講は法政大学社会学部・藤田真文教授の「BC級戦犯の樹」、第10講は法政大学社会学部・小林直毅教授の「水俣の樹」。

参加した学生からは「言葉で理解するより映像の方が頭に入り、印象も強く残る」「映像があって、その解説もあり内容を理解しやすくなる」「ジャーナリズムと報道のあり方が、番組そのものの視点や内容に凝縮されている」「新聞のデータベースはあるが、映像は簡単には手に入らない」などの感想が寄せられた。なおアンケート集計では、「大いに役立つ」83%、「役立つ」が14%で、大学の授業に放送番組を活用することに対して高評価する回答が得られた。